

三、農村における日蓮宗寺院問題と 現実課題

——まとめにかえて——

久 住 謙 是

国土庁の五十七年版「過疎白書」は、過疎地域の実態を分析した結果を報告している中で、人口の減少は鈍化したものの、自然減の続く市町村が過疎地域の四割を超え、過疎化はさらに広がる傾向にある、とし、人口減少と共に、出て行った若者たちが帰ってくる見通しがなく、次の世代が、あとを引き継ぐ基盤が整っていない。過疎解消は、将来にも希望が持てない。むしろ第二次過疎化の開始の危険があると指摘し、今後も過疎化現象は続いてゆくと結論している。

旧過疎法施行一〇年、さらに新過疎法がスタートして四年になるが、相変わらず、深刻な様相を加えている。Ｕターン、Ｊターンの大都市から地方都市へ就職の転換が図られても、農村への復帰ではない。人口吸収の雇用機会、高い経済効率の産業が成立しないかぎり、農村の人口回復は望めない。さらに、高齢者社会の高死亡率、自然減は、さらに過疎化に拍車をかけることになる。

こうした過疎化現象下、日蓮宗寺院、教師と檀家の実態調査は緒についたばかりである。

今回、初めて行った早川町および福井県においての調査結果は、早川町における空寺、住職不在寺が八割に及んでいたこと、その中で、檀家の独自の活動が行われていたこと、さらに、福井県における、住職後継者がいない寺院が、県下の半数に達していたことが明らかになった。

後継者難・住職不在問題こそ、まさに過疎化現象下の寺院問題であつたといえる。

ここで、二地区の調査をもとに、過疎地の日蓮宗寺院を表示してみた。図表17の通りである。

過疎化の時間的移行を横軸にとり、現象のあらわれ方から、初期（過疎的傾向）・中期（過疎）・後期（過疎）と三期に分けた。縦軸は、寺院・教化活動（教師）・檀家・課題とに分け、過疎化が時間的経過で、どのように変化してゆくかを個別に示した。最後の課題は、その時点で惹起している問題を示した。さらに過疎事象の要素を今後の調査結果により付加してゆけば、さらに表示がくわしくなる筈である。

まず、過疎化の推移から見てゆくと、まず初期段階は、過疎的傾向を強めている地域として、福井県の事象が位置づけられる。住職は常住であるが兼職者が多い。現在、檀家教化に支障はない。檀家の顕著な増減はないが、僻地に減少がみとめられる。この地域の最大の当面する問題は、寺院の半数に後継者住職がいないということである。これは、寺族の生活問題に関わってくる。すでに後継者なし寺院が、住職が欠けた後、代務寺・空寺化の初象としてあらわれている。これは、過疎化現象の中期へ移行するきざしを示していると思われる。

次の中期段階は、過疎化現象が進んでいる早川町の事象が位置づけられる。過疎化が大きく影響している状況である。寺院には、ほとんど住職がいない。空寺と化している。代務寺・名儀住職寺・無住寺といわれる寺院である。檀家教化は、必要なとき随時招かれる教師によっている。檀家が老人中心で、離檀、減少がめだつ。当面する課題は、減少しつつある檀家による寺院護持問題、住職教師の日常的教化活動がないことである。現在も、挙家離村による檀家減少が続いており、一層、過疎化のきびしさを加えている。

冒頭にいわれるように、檀家の次の世代があとを継ぐ地域活性化の基盤が用意されなにかぎり、過疎化現象をとめることは不可抗力である。早川町のとくに山間部立地の少数檀家寺院は、すでに無住寺化しており、さらに過疎後期へ移行する要因をもっている。

図表17 過疎地の日蓮宗寺院

過疎化の推移			経過 個別
後 期	中 期	初 期	期 別
過疎化進行の将来	(早川町の現状)	(福井県の現状)	型 態
空 寺 無住寺の荒廃	住職転出遷化代務 寺 名儀住職寺(空寺) 無住寺住職不在	住職常住 住職の兼任 後継者なし	寺 院
なし	随時他から依頼僧 の法務出向	通常活動支障なし	教化活動(教師)
全檀家転出 檀家なし	檀家減少 離檀 檀家老齢化	檀家増減なし 又は漸減傾向	檀 家
寺院護持管理問題 再活用問題 統廃合問題 法人移転問題 関係者間の話し合い	檀家による寺院護 持問題 教師の檀家教化問 題、依頼僧への助 成	後継者難問題 寺族生活問題	課 題

② 一、早川町・福井県の問題点を模式的に表した。
二、過疎的傾向(初期)から過疎指定地(中期・後期)への移行を示す。

後期段階は、私に設定したものである。将来、過疎化現象を強めていった結果、予想される事象をあげてみた。寺院は、檀家なし、全檀家が都市部へ移転してしまい。寺院活動のはたらきを失い、無住寺となって、自然の荒廃にまかせる状態に陥入った段階である。事実上の寺院崩壊である。

早川町の寺院が、将来、後期段階に移行しないという保証はない。むしろ、その危険性さえあるといえる。

こうした段階にまでたち入った時、維持管理問題、再生問題、統廃合問題、法人移転問題など、当該関係者間の話し合いが、持たれるようになる。

以上が、過疎化を三期に分けた段階別の説明であるが、さらに、個々の問題を初期から後期まで列示すると、過疎化現象は、

寺院後継者難 → 代務寺・無住寺

住職による教化活動 → 住職不在・随時の教化活動

檀家増減なし → 挙家離村・檀家減少・檀家高齢化

のような図式が示される。

過疎化現象は全国的である。類似の寺院が、相当数にのぼるであろう。

日蓮宗寺院の代務寺数が全国で四五七カ寺に達する。その過半数が、後継予定者が無い寺院であること、住職教師および非住職教師が普段常住していない寺院が、全国で五三一カ寺ある。これらは、全国の過疎地域寺院の実状がこの統計にも反映していると考えられる。

かつてない、構造的社會変動の中で、地方寺院の存亡に関わる危機的状況が、そこにある。この問題をぬきにして、伝道宗門の明日を語れないのではなからうか。

上記に述べた過疎化現象を、その進行の段階別に三期に分けて現状を認識した。

過疎地の実態は、老人とともに取り残された寺院というイメージが強い。

青壮年層が去り、こどもが去り、残された年寄りが、先祖伝来の土地と家と菩提寺を守っている。若者の働く活氣溢れる姿が見当らないことは、淋しいことである。こどもの泣き声が聞えないのは、地獄の静けさのようである。

人が去っていなくなるということは、どんなに残酷なことか、地域社会の崩壊とは、このような状況か、と体験し痛感した。

たった一軒になっても、オラたちの寺はムラに残った者が守るといふ老人の言葉の背景に、先祖から受けついだ信仰習慣が、寺と宗旨は守ってゆくことが家の伝統であるという村落の地縁的閉鎖社会の意識が、はたらいっているようにみえ、過疎地で寺院が、このようなかたちで護持されているのである。

人口流出、過疎化という決定的な農村の変貌をとげるまでに、戦後、大きな変容を越えてきた。いわゆる経済的には、農地開放によつて古い秩序が崩れ、民主主義の普及が封建的身分関係を崩した。都市への通勤・兼業・兼職の出現は、農民層を解体させ、村落共同体の拘束力を低下させた。その上で、地域を機能させる人口絶対数の不足、人口流出が地域機能を決定的にマヒさせる契機となった。

徳川幕藩体制化で確立された寺檀関係が、戦後、一挙に大きな変化に見舞われたため、社会的急変に対応しきれず生み出された状況の、こうした戦後の歴史的背景がある。まぎれもなく、寺院の活動がとりまく社会的諸条件に適応しきれない大きな困難に直面しているのである。

日蓮宗寺院は、宗勢調査を見ても、他宗派寺院より比較的都市型といわれながらも、過半数が農村寺院であることは間違いない。

さきに考察した全国の住職代務者寺院も、維持困難が主な理由であり、将来、後継住職の見通しが無い空寺化が進んでおり、その多くが農村寺院である。また、現宗研が調査した教師不在の調査では（昭和五十七年）、何らかの理由

で住職教師が日常に不在となっている寺院が、全国で五三四カ寺にのぼっている。これは、代務寺調査とともに宗門全寺院の一分以上に達しているのである。

昭和五十七年度「過疎白書」に、今後も過疎化が進むと予測していることを考慮すれば、さきにみた過疎初期的傾向にくみこまれるであろう寺院や、中期から後期へと移行して、宗費賦課金の免除問題・荒廃寺院を具体的にどう対処したらよいか、現実の問題となることが予想される。

因みに、戦後、法人設立、寺号公称した新寺建立は、昭和二十五年以来昭和五十七年まで、約四半世紀の間、一七四カ寺を数える。住職個人の創建努力、弘通の成果を高く評価しなければならぬであろう。

しかし、さきにあげた、今後、過疎地の荒廃寺は、さらにそれを上回る寺院数が予想される。寺院数を指標として宗勢をみれば、宗門はじり貧傾向といわざるをえない。

都市寺院は、人口増によって檀家の自然増加をもたらし、または檀家数が飽和状態のゆえに、伝道には閉鎖的で信徒教化まで熱心にならない。農村寺院は、経済的に貧しいために兼業・兼職して教化活動を停滞させている。宗門は、都市に未開教地区を放置し、農村には過剰寺院を支えきれないほどかかえている。人口の流出と流入の大移動が行われた社会変動に対して、積極的に対応する姿勢を示し得ないできた、宗門教師としての反省が、われわれにある。過疎問題では、その意味で、都市過密問題と連関して表裏の問題である。

過疎と過密は、再三述べるように戦後の高度経済成長の落し子である。低成長時代に入っても、その大きな歪みは是正される見込みはない。それ自体、根本的な解決は困難であるが、ただ徒らに時代に流されていたのでは、問題はさらに深刻の度を増すことになる。

今、われわれに問われていることは、この現実が宗門の危機と認識できるかどうかである。

過疎地にとどまっている教師、同行の檀家の人たちに対して同門意識を共有することができるであろうか。

不可抗力と考える、大きな社会変動と戦いながら、寺を護り、信仰を堅持して生きようとする教師と檀家の人びとに対して、手をさしのべることができらうか。それは、とりもなおさず、未開教の都市域の、教化の手がさしのべていられない人々にも共通していえることである。

「日蓮一門」と、つねに異体同心を門下に求められた、聖人の同行同信の門下意識、連帯と結束が、いま要請されている。

都市寺院と農村寺院は、それぞれの立場から、宗門の全体、現代に置かれている状況を正しく把握し、未来に向けた宗門のため、責任を共有する宗門意識を持つことである。

過疎寺院に欠けているもの、都市過密寺院が求めているもの、緊密な相互の提携と交流が行われることによって、補完しあえる面が発見されるのではなからうか。

日蓮聖人は、「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」（『撰時抄』）と、法を弘むるには、時代背景を正しく認識することを教示されている。さらに、法華経弘通の用心として提示された五義（綱）、即ち教・機・時・国・序（師）は、「仏法をひろめんとをものはんものは、必ず五義を存して正法をひろむべし」（『顕謗法抄』）と仰せられている。五義は、教義理論に終ることなく、弘通する教師のための実践的内容と理解すべきある。五義判に導びかれて説くならば、行学につとめ、弘通の使命観を高めるとともに、説くべき人びと、その時代と環境の考察なくしては、適切な教化は不可能であることを知るべきであろう。

過疎地の寺院問題も、都市過密地の開教問題も、教化の不適應を露呈した現象である。たえず歴史的社會に生き、教化の活性化をはかることは、独自性を堅持しつつ、その時代の社會環境に適應する努力を怠つてはならないだろう。今こそ、日蓮聖人の五義に学んでこそ、教化の実効があげられる。

過疎寺院の現状と未開教都市の問題は、日蓮聖人が示された五義の内、機・時・国＝教化すべき人と時と場所のあ

りようの考察が欠落、または適切な対応ができずにきたといえる。

過疎は、まさしく、教化対象たる機と時と国の条件を失った地域の問題であり、都市未開教地は、機と時と国の条件が整いつつも、教師による（序）・弘通（教）の方策が取られていない問題の地域である。

産業や都市が成立発展するためには、資源や生産手段・労働力・市場・交通など、立地論的諸条件があると同様、過疎対策・開教対策として寺院立地論があつてしかるべきだろう。現代という歴史的現実と社会的広がりとの客観的状況を無視しては、教化活動の実効はあげられない。

日蓮聖人が弘経の用心として示された五義は、教化にとりくむ実践活動の指南であると受け取るべきであろう。現代の教化論・開教論、ひいては寺院立地論であると考えるのである。今、教師は、どのような状況下で教化にとりくむべきか、五義に配当して、批判をかえりみず私に試案したのが、次に示す「過疎・過密に対応する教化活動―寺院立地論・開教論―」である。過疎問題を契機として、宗門の危機が共有の意識となり、現状打開の一助になれば、と願うものである。

過疎・過密に対応する教化活動 ―寺院立地論・開教論―

（久住謙是試案）

へ へ はここにちの問題状況と課題を示す。

教―法華経は釈尊が説いた真実の教えを知ること。

へ 法華経・御遺文の学習、諸宗教・諸思想の研究。へ

機―教化のため、現代に生きる人びとのありようを知る。

〈都市人口集中、信仰・宗徒意識の稀薄化、宗教的浮動人口、脱菩提寺、靈園指向、宗門地方出身者対象の教化活動・開教問題、農村人口の減少、過疎化、老人社会、檀家の高齢化、離檀、墓地放棄、思想意識の多様化、核家族化。〉

時――教化のため、歴史的現実の問題状況を知る。

〈新憲法の制定、家族制度の廃止、戦後産業の復興、高度経済成長社会の構造的変革、過疎・過密問題、農業社会から工業社会へ。〉

国――教化のため、現実の世界と日本国土の実状を知る。

〈核戦争の危機、生態系破壊、農村の崩壊、都市拡大と環境問題、地方の過疎化、都市の過密化、町村地域共同体の解体、公害の多様化と広域化。〉

序――教化にとりくむため、歴史的現実問題の状況を知り、世界や日本・地域に何が起こり、そこに生活する人びとのありようを知り、現代に適応した活動をすすめる方策を検討し、法華経流布の使命と情熱を高める自覚を持つて弘通、実践するため、教化内容と教師の基本姿勢を明らかにする。